HOKKAIDO UNIVERSITY

Title	ケインズ『一般理論』私注　賃金基金説の系譜について(5)
Author(s)	白井, 孝昌
Citation	經濟學研究, 35(2), 147-172
Issue Date	1985-09
Doc URL	https://hdl.handle.net/2115/31695
Type	departmental bulletin paper
File Information	35(2)_P147-172.pdf

Hokkaido University Collection of Scholarly and Academic Papers : HUSCAP

経済学研究 35-2
北海道大学 1985. 9

＜研究ノート＞ ケインズ『一般理論』私注

賃金基金説の系譜について (5)

白井孝昌

I

リカードの『利潤にかんするエッセイ』の内容に触れるに先立って，われわれはいま一つの予備的考察を必要とする。リカードがこのパンフレットを最終的に書き上げる直前に「非常に熱中して読んだ」マルサスの『地代の研究』の中で，彼の地代の理論がじっさいにどのような形で提示されていたかを検討することがそれである。このような準備が必要とされるゆえんは，サイモン・パットンの論文「リカードの解釈」[1] の冒頭の数パラグラフにわたる所論から容易に読み取ることができるであろう。パットンはペンシルヴェニア大学の教授で，この論文は1893年に発表されたものである。当時のアメリカにはヨーロッパ諸国からさまざまな経済学の知識が流入し，その混迷の中で「演繹的経済学か，帰納的経済学か」といった類の方法論争が流行していたものであるが，そのような時代の背景の中で，彼はこう述べている。

「(1) リカードの死後，彼と彼の著作物に対する関心はますます高まってきた。演繹的経済学者たちのすべてにとって，彼の理論はそれ以後の著作家の誰にもない魅力があったわけである。……

(2) 他方，帰納的および歴史的傾向をもつ経済学者たちのあいだでは，リカードの名を冠せられた学説は何であれ信用されず，また，しばしば軽蔑をこめて扱われている。このような論争に立ち入るつもりはない。……私はただ，彼に従う人々や彼の弟子たちのあいだで形成されてきたリカードの諸著作の解釈の問題を，彼と彼らとに対して好意的な立場から論じたいと思う。……しかし，彼の側に立つ人々は，彼を弁護するにあたって，彼に間違った光を当て，経済理論の歴史を歪曲してきたように，私には思われるのである。リカードは非常に偉大な人物であるから，間違った賞讃を必要としない。経済学者としての真の歴史的位置づけを与えられるならば，彼のすぐれた点はおのずと明らかになるのである。

(3) 1815年の初めにマルサスの特筆すべき論文が現われて，地代理論をめぐる論議の口火を切った。その1・2箇月後にリカードのなおいっそう注目すべき論文が出たのである。……マルサスの論文とリカードのそれとのあいだには顕著な相違が見られる。マルサスの立場と，それから2年後に公刊される『経済学原理』の中でリカードが取った立場とを比較するとき，リカードが経済学にもたらした変革の性格はより明らかになるであろう。マルサスの論文とリカードのそれとの間の調子の違いを，どのように説明すべきであろうか。わけても，リカードの『経済学原理』のような非常に重要な著作が，かくも突然に出現したことを，われわれはどのように説明すべきであろうか。たとえば，彼がマルサスの論文を読んでいたときに，彼の眼前に経済学の新理論が，いわば突然の啓示のよ

1) Simon N. Patten, "The Interpretation of Ricardo", *Quarterly Journal of Economics*, Vol. VII, No. 3 (April 1893), pp. 322-352.

うに，立ち現われたのであると主張することができるかもしれない。しかし，すでに円熟した人物の観念の中に，このように急激な変化が起こることはめったにあるものではない。ヒュームがカントに対して影響を及ぼした事例に示されるように，ある人物が時として他の人物の思考の上に新しい衝撃を与えることがあるのはほんとうである。しかし，この古典的な事例の場合にカントが彼の体系を完成するのには多年の経過があったのであるが，リカードは1・2箇月の間に彼の思考の進化を遂げたように思われる。

（4）この難問から抜け出る一つの道で，後世の経済学者によって好んで受け容れられたものは，マルサスの著作を全部無視して，リカードの地代の理論やその他の諸理論を彼自身の思考の所産と見る道である。しかしながら，この道をとるのは，マルサスに不公正であるとともに，リカードの思考の発展に間違った光を当てることになる。これらの諸理論を一括して，それらのただ一人の発見者がマルサスであるのか，あるいは，リカードであるのかを決めつける必要はない。これら二人の著作者の作品は，はっきりと異なるものであると同時に，補完的なのである。」[2]

やがて見るように，リカードの『利潤にかんするエッセイ』の中では，利潤の理論と地代の理論がわかちがたく結合されているので，まえもって，マルサスの『地代の研究』の中での地代の理論のありようを確認しておくことが，パットンの指し示す方向に沿うことになるのである。上掲の一節に続くパットンの所論は，マルサスの経済学とリカードのそれとの性格の相違について，簡明にして，かつ示唆に富む説明を与えているので，いますこし引用を続けることにしよう。

「（6）これら二人の著作家が，経済学研究における彼らの出発点をアダム・スミスの著書に置いたことは，はっきりしている。『国富論』は，二つの異なる経済，あるいは二つの異なる見方を，その成分として含んでいる。しかし，それらは非常にみごとに混ぜ合わされているので，その調和が破綻することは，工業世界の新しい展開が新しい問題を前面に押し出してくるまでは，明らかにならなかったのである。

（7）より古い経済を農業経済と呼んでもいいであろう。それは人民の大多数が田舎に住んでいて，土壌の耕作に依存して生計を立てていることを想定する。そのような条件のもとでは，土地問題が社会にとって死活的重要性を有しており，そして，土地からの余剰が社会進歩のほとんど唯一の原因である。資本の使用は非常に小さいので，生産における要因（an agent in production），あるいは分配における要素（a factor in distribution）として，土地と労働とに加えて，資本を位置づけることに十分な重要性が認められていない。利子を取って貨幣を貸しつけるのは悪事であると看做される。なぜかというと，その借り手は受け取った貨幣を贅沢のために費消して，それを社会の生産力を増強させるために用いないのが普通のことだからである。所得の諸源泉のあいだで最も重要なものとして対置されるのは，地代と賃金である。前者は社会の余剰を，そして後者はその費用を表わす。それゆえ，繁栄は地代の増大に依存する。地主たちが繁栄すれば，社会も繁栄する。なぜなら，地主たちの余剰は社会全体に拡散して，その繁栄を創り出すからである。このような観念は，他のどの思想家によるよりも，重農主義の思想家によって徹頭徹尾，展開されたのであるが，しかし，それと同じ原理は農業的地域社会で構成される全社会を考察した初期の著作家たちの根底にすべて横たわっていたのである。

（8）18世紀の工業的発展の結果として生じた都市の成長は国民的進歩に対する新しい見方を創り出した。その見方は工業経済と呼ぶことができよう。資本の急速な増加がこの社会の最

2）*Ibid.*, pp. 322-323.

も主要な現象である。都市生活のすべての問題がこの一事に集約される。建物，機械，原料，完成品，そして生産と交換に必要とされるその他のあらゆるものが，もっぱら資本の諸形態として見られるのである。そうして，生産が自然に依存しているという事実（田舎経済の主要な事実）は看過ないしは無視される。食糧の供給でさえも，自然的諸力の所産としてよりも，むしろ，貯蓄の所産として考察されるのである。

（9）こうして，二つの生産要素（factors of production）は資本と労働であり，所得の二つの形態は利潤と賃金である。農業経済で土地が演じる支配的な役割を資本が演じることになり，そうして，社会の余剰は地代に代わって利潤となる。賃金は依然として費用と同じであるが，しかし，それは地代にではなく利潤に対置される。農業経済では賃金が低下すると地代が上昇するが，工業経済では賃金が低下すると利潤が上昇し，そして，その反対も成り立つ。ちょうど農業経済で繁栄が地主たちの繁栄によって測られるように，工業経済では繁栄は資本家たちの状態によって測られる。地代の上昇の代わりに利潤率が繁栄の基準になるのである。」[3]

《農業経済》と《工業経済》という二つの異なる見方（modes of viewing economic affairs）を提示した後で，パットンは急いでこうつけ加える。

「(10) このような比較をするにあたって，私はこれらの諸前提のすべてを使用した著作家，もしくはその集団などが存在しないことを十分に知っている。彼らの思考方式の根底にはあるが，しかし，彼らの著作の中では部分的にしか用いられていない諸要素を私が使ってみようとしているにすぎないのである。著者たちは各々その国民経済に対する偏りのない一つの見方を提示しようと意図したのである。しかし，彼の環境と教育が彼の見解に色を付け，そうして，先入見として植えつけられてある意見と調和しない事実を無視する傾向が創り出されたのである。都市派の経済学者たちでさえもその多くが，彼らの国民経済を田舎派の見地から見たのであり，そうして，都市の，あるいは現代生活における資本の，工業的な機能を見落としていたのである。」[4]

パットンのこの注意は，その後に続く彼の議論を誤解しないようにするうえできわめて重要である。彼の《農業経済》と《工業経済》という二つの概念は，喩えていえば，マルサスとリカードの諸著作が置かれてある平面の上に適当に定められた二本の座標軸のようなもので，それらが織り成す座標系の中でマルサスとリカードの作品を見れば，両者の相対的な位置関係がより明確に了解できるといったようなものである。それらはあくまで了解のための手段であって，理解さるべき対象ではないのであるから，それらがマルサスとリカードの立場の理解を助けるうえでいかに有効であっても，それらは彼らの立場と同一視されてはならない。

パットンはその議論をこう続ける。

「(12) これらの二つの経済を比較するなかで，マルサスとリカードを区別し，そして同時に，彼ら相互の交際を彼ら自身と経済科学の発展にとってきわめて価値あるものにした両者の相違点の基盤を，われわれは見出すであろう。

(13) マルサスは繁栄の問題を田舎の見地から眺めたのであり，そして，国民的繁栄を農業的繁栄と同じものであるとしたのである。田舎の繁栄の指標を彼は農業地代の大きさと見たので，農業地代の増大は国民的繁栄の増進の尺度であると考えたのである。しかし，リカードは別のタイプの人物であって，ひとり都市の環境のみが与えることのできる本能と教育を有した。彼は都市生活の工業的な現象を取り入れ，それらの特徴に基礎を置く経済を創造した最初の著作家である。土地問題と商業問題は彼にと

3）*Ibid.*, pp. 324-325.

4）*Ibid.*, p. 325.

って副次的なものであり，そうして，それらは都市における工業的生活の諸要素が処理されてしまうまでは考察されないのである。彼以前の著作家たちにとって，純粋に工業的な生活は，商業と農業の諸法則を修正したものとして考察されるにすぎない。リカードにあっては，その序列は逆転している。まず工業的事実から彼は基本的な諸法則を展開し，そうして商業と農業の諸法則がそれに調和するように作られているのである。

(14) 経済学の諸問題にかんするリカードの思考は利潤率を決定する諸条件の研究をもって始められる。そうして，その研究を中心として，その周囲に彼の体系のすべてが構築されるのである。利潤率は生産者たちの競争によって低下させられるとアダム・スミスは述べたのであった。リカードはスミスに忠実に従っていたけれども，この点において彼とは異なっていて，この見解に対抗することによって独立の思考を開始した。リカードは，価値が全体としては上昇も，また下落もしえないということを示したのである。価値が全般的に高く，あるいは低くなることは不可能であった。それゆえに，利潤の低下は，競争の増進以外に何か別の原因をもたなければならなかった。その真の原因を，彼は価値の分析の中に見出したのである。自由に生産されるあらゆる商品の生産費は，それらを生産するのに必要とされる労働量にもっぱら依存し，そして，一般的価値は上昇も下落もしえないので，利潤はこの労働の費用によって決定されると，彼は見たのである。雇用主には，賃金の上昇に対する補償を受ける道は存在しないのであった。そうして，ただ一つの帰結——すなわち，利潤の低下——がありうるのみであった。

(15) しかしながら，リカードにとって，高賃金は労働者たちの状態の改善を意味するものではなかった。彼はマルサスによって開発された人口法則を堅く信じていたのであって，その結果として，高賃金は労働者が消費する商品の高騰を示すものであると考えたのである。さらに彼は，労働者たちの消費するものが主として食糧であると仮定し，そうして，それゆえに，高賃金は食糧価格の高騰を示すものであると結論した。この一連の推論によって，利潤は食糧の価格に対置される。低い利潤は食糧の高価格を，そうして，高い利潤は食糧の低価格を意味するのであった。こうして，リカードは彼の体系の根底に横たわる，かの有名な対蹠的関係に到達したのである。利潤率は食糧の価格に依存するというこの命題を彼はしっかりと把握し，そうして，それ以後の研究のすべてを通じて，その命題を見失うことがなかった。

(16) 当時，イングランドでは利潤が低下しつつあった。そして，食糧の価格は上昇しつつあったのである。それゆえ，後者は前者の原因とされた。この食糧の高価格は食糧の輸入に課された関税によるのであった。そうして，リカードは当然，自由貿易論者となって，穀物法を利潤率の低下の原因として非難したのである。彼の思考の発展のこの段階において，リカードは食糧の高価格と，そして低い利潤率が工業的進歩の必然的な帰結であるとは想定していなかった。彼の結論は，当時のイングランドの工業の具体的な状況に基づいて下されたものである。政府の諸制限が惹き起こした食糧の異常な高価格を直すための政策が自由貿易なのであった。それを通じて，利潤率はより高くなり，工業の繁栄を回復することができるのであった。

(17) マルサスは，このような結論に同意しなかったのである。彼は経済問題を農業的見地から眺めたのである。そうして，国民的繁栄は食糧の高価格に依存するものと考えた。地代は新しい富の創造であって，工業者階級から地主たちへ向けて生じる富の移転ではないと彼は主張したのである。リカードは，しかしながら，地代がたんなる価値の創造にすぎず，富の創造ではないと考えた。地代の上昇は，社会の余剰が生産者から地主へと移転されること，そして，利潤が低下することを示すのであった。一

度は利潤であったところのものが，食糧価格の高騰を通じて地代になったのである。

(18)『地代の性質と高進』にかんするマルサスの論文は穀物法をめぐる論争の所産であった。食糧の高価格は，穀物法によるのでも，また独占によるのでもなくて，国民的進歩の自然的帰結であることを示したいと，彼は望んだのである。人口の増加は，より多くの食糧を必要とし，そうして，より多くの食糧はより劣質の土地を耕作することによってはじめて得ることができるのであった。これらの劣質な土地を耕作するために生ずる高い費用が食糧価格の高騰を必要とし，そうして，普通の利潤率で劣質の土地を耕作することを農業者に許容するように食糧の価格が騰貴することがないならば，一国の人口は増加することもできず，繁栄することもできない。それゆえ，食糧の価格が高いのは人口増加の帰結であって，穀物法の帰結ではない。穀物法は農業者たちが彼らの使用する土地を改良するにいたる諸動機を強化し，そうして，増大する地代を支払うための基金を創り出すのであった。それゆえに，マルサスは当然，穀物法を弁護する保護貿易論者になったのである。

(19) 地代にかんするこの論文は，マルサスが期待した効果をリカードに対して与えなかった。リカードはマルサスが見なかったものを見たのである——すなわち，この新しい理論はリカードの体系の中にうまく適合し，そして，食糧価格と利潤の関係にかんする彼の理論の証明を，より完全なものにするということを見出したのである。この地代法則がリカードの体系の中に入って来たのは，一つの基礎としてではなく，すでに展開されていた理論のよりすぐれた証明としてであった。彼は，いまや，食糧の高価格を工業的進歩の自然的帰結であると見るようになったのである。それゆえ，彼は食糧価格の上昇とともに利潤が低下するという彼の理論を，イングランドの状態の特殊研究の上にではなくて，一般的な自然法則の上に基礎づけることができるようになった。穀物法がイングランドの食糧価格を上昇させ，こうして利潤率が低下するという特殊な結論を下すかわりに，国民的繁栄の増進が起こるごとに利潤率は低下するという，よく知られた歴史的事実を演繹的に証明しようという議論の系譜に属する人々の心に彼は訴えることができたのである。」[5]

II

上掲のパットンの所論は，マルサスの『地代の研究』とリカードの『利潤にかんするエッセイ』とを，彼の《農業経済》と《工業経済》を二つの軸とする座標系の上で対比するというやり方で提示した一つの解釈である。われわれの次の課題は，マルサスとリカードの学説のありようを，もっと直接的に見ることでなければならない。まず，マルサスの『地代の研究』[6]を，とりわけ，その中に含まれる地代の理論のありようを，検討することから始めよう。このパンフレットの本文は，原版ページ数にして61ページにわたり，117個のパラグラフから構成されている。本文には章もしくは節などの区別がいっさい示されていないので，われわれが前稿でマルサスのパンフレット『一見解の根拠』について行なったのと同じように，すべてのパラグラフに (1)，(2)，……，(117) の通し番号を付し，それらを適当にまとめて小見出しをつけた目次を作成して，このパンフレットの全体構成の概略を示すことにしよう。

マルサス『地代の研究』目次

Ⅰ．地代の定義。地代は原生産物の余剰として定義されるので，まず原生産物の高価格の

5) *Ibid.*, pp. 326-330.

6) Thomas Robert Malthus, *An Inquiry into the Nature and Progress of Rent, and the Principles by Which It Is Regulated* (London: John Murray, 1815), reprinted in *Thomas Robert Malthus on the Nature and Progress of Rent* (Baltimore: The Johns Hopkins Press, 1903), edited by Jacob H. Hollander.

諸原因から研究が始められるべきこと。パラグラフ（1）から（8）まで。pp. 1-2.

Ⅱ．地代にかんする従来の諸説（アダム・スミス，重農主義のエコノミスト，セイ，シスモンディ，ブキャナン）の紹介。生産物の余剰は独占によって生み出されるが，彼らは地代もそれと同じような性質と法則を示すものと考えてきた。マルサスはこの点に同意しない。パラグラフ（9）から（17）まで。pp. 2-8.

Ⅲ．地代の性質と起源。

§1．原生産物の高価格には三つの原因があること。パラグラフ（18）から（21）まで。p. 8.

§2．第1の原因，土地の質について。パラグラフ（22）と（23）。pp. 8-9.

§3．第2の原因，生活必需品に特有の性質について。パラグラフ（24）から（34）まで。pp. 9-17.

§4．第3の原因，肥沃な土地の相対的稀少性について。パラグラフ（35）から（41）まで。pp. 17-21.

Ⅳ．地代の増減を支配する諸法則。パラグラフ（42），p. 21 から。

§1．資本蓄積に伴なう耕作の進展（粗放的耕作と集約的耕作）。耕作の費用が低下して，しかも原生産物の価格が低下しないならば，余剰が発生し，それが農業者と地主の双方を刺戟して，農業に向けられる彼らの努力を低下しないように持続させること。パラグラフ（43），pp. 21-22.

§2．生産物の価格に比して耕作の費用を低下させる主要な原因4種。

第1の原因：ストックの利潤を低下させるところの資本蓄積，

第2の原因：労働の賃金を低下させるところの人口増加，

第3の原因：所定の結果を生産するのに必要とされる労働者数を減少させるところの農業の改良，ないしは努力の向上，

第4の原因：生産費を名目的に低下させることなく，その生産費と生産物の価格との差額を増大させるところの，需要の増大に起因する農業生産物の価格騰貴。パラグラフ（44），p. 22.

第4の原因の詳細な検討。パラグラフ（46）から（50）まで。pp. 23-26.

これら4つの原因の作用によって余剰が増大すると，地代は上昇する。パラグラフ（51），p. 26.

§3．余剰の変動の実態にかんする諸考察。パラグラフ（52）から（71）まで。pp. 26-35.

とりわけ，イギリスで過去20年間にわたって，土地と結びつけて雇用された資本の莫大な追加分の大部分は，イギリスの土壌から生み出されたものであって，商業と工業からもたらされたものではないこと。そうして，急速かつ有利な資本蓄積を可能にしたのは，農業ストックの高利潤であったこと。パラグラフ（53），pp. 26-27.

地代の上昇と耕作の拡張をめぐる観察。パラグラフ（54）から（71）まで。pp. 27-35.

Ⅴ．自然的（独占的でない，すなわち，競争によって消滅することのない）地代の存在。パラグラフ（72）から（76）まで。pp. 35-37.

Ⅵ．自然価格あるいは必要価格についていえば，工業製品価格の抑圧は工業の全面的崩壊にみちびくけれども，穀物価格の抑圧は数量を減少させるにとどまる。この相違は，農業における土地と工業における機械の性質の違いによるものであること。パラグラフ（77）から（82）まで。pp. 37-39.

Ⅶ．従来の学説によると，原生産物は独占価格で販売されるものとされてきたけれども，穀物は工業製品と同じように，その必要価格で販売されること。穀物価格を決定する自然的原因の分析。パラグラフ（83）から

(86) まで。pp. 39-41.

Ⅷ. 以上に述べた穀物価格決定の事情は外国穀物の輸入によって修正されること。パラグラフ (87) から (93) まで。pp. 42-45.

Ⅸ. 金，銀の価値が低いのは富と繁栄の証拠ではないとするアダム・スミスの見解に対する批判。原生産物の高価格は富の増大に必然的に随伴する現象であって，前者なしには後者を手に入れることはできないこと。パラグラフ (94) から (96) まで。pp. 45-47.

Ⅹ. 消費者としての労働者階級について，穀物の高価格が彼らに確実に損害を与えるとするのは近視眼的な見解である。彼らの生活状態は他のより強力な諸原因に依存していて，おそらく，穀物価格が低い国よりも高い国において，しばしばより良好であること。パラグラフ (97) から (102) まで。pp. 47-52.

Ⅺ. 農業資本に対する課税は，一般的にいって地主に帰着するけれども，農業者の意欲を損なうことによって，耕作の進展と土地の改良を抑圧する。パラグラフ (103) から (107) まで。pp. 52-55.

Ⅻ. 地代が上昇する趨勢のなかで，借地契約更改時の地代の取り決めにあたり，地主が犯しやすい誤りについて。パラグラフ (108) から (117) まで。pp. 55-61.

まず，上掲目次のⅠにあたる8個のパラグラフを引用することから始めよう。

「(1) 地代 (the rent of land) は国民収入 (the national revenue) の一部分であり，そして，それはきわめて高度な重要性を有するものであると，つねに考えられてきた。

(2) アダム・スミスによれば，それは富の三つの窮極的源泉の一つであって，そうして，これらの源泉によって社会の三大階級の暮らしが維持される。

(3) 重農主義の経済学者たちによって，それは非常に重要なものとして区別されている結果として，もっぱらそれのみが富 (riches) という名称に値するものと考えられており，そうして，それは国家の租税を支えることができるとともに，また，それらの租税が窮極的に帰着するところの唯一の基金であるとされている。

(4) そして，穀物法と，また，地代が原生産物の価格と農業の改良の進展に及ぼす効果にかんして行なわれつつある諸論議のゆえに，それは，おそらく，現時点においてわれわれの注目を受ける格別の理由を有するであろう。

(5) 地代とは，全生産物 (the whole produce) の価値のうち，いかなる種類のものであれ，土地の耕作に関係するあらゆる支出が支払われてしまった後で，その土地の所有者に残される部分であると定義することができるが，それらの支出の中には，当該期における農業ストックの通常利潤率 (the usual and ordinary rate of the profits of agricultural stock at the time being) で見積もられるところの，そこで雇用されている資本の利潤 (the profits of the capital employed) が含められる。

(6) 偶発的かつ一時的な事情から，その農業者はこのような額よりも多く，あるいは少く，地代を支払うということが時として起こる。しかし，この額は，現実に支払われる地代が絶えずその方向に引き付けられて行く点であり，そうして，それゆえに，地代という用語が一般的な意味で用いられるときにはいつでも意味されているところのものである。

(7) 地代の直接的な原因は，明らかに，原生産物が市場で売られているところで，その生産費を越える価格の余剰である。

(8) 最初の研究対象は，それゆえ，おのずと明らかなように，原生産物の価格を高くする原因，あるいは諸原因である。」[7]

以上の8個のパラグラフから構成される第Ⅰ

7) *Ibid.*, pp. 1-2.

章は，まず，地代概念の有する重要性をアダム・スミスの創始した学問の背景に照らして述べ〔(1)，(2)，(3)〕，つぎに当時の重大な政治問題である穀物法論議の中でこの概念が演ずべき役割の重要性を示唆し〔(4)〕たうえで，その定義を与え〔(5)〕，そうして定義される地代概念と現実に支払われる地代との間の距離に照らして用語上の注意を与え〔(6)〕，最後に，地代研究の糸口を原生産物 (raw produce) の高価格の諸原因の究明に求めるという彼の着想〔(7)〕が非常に簡潔に記されている。ここにいう「原生産物」とは，土地から直接的に生み出される生産物を指し，穀物によって象徴されるものと解してよいであろう。そうして，パラグラフ（5）にある「全生産物」も土地から生み出される生産物を意味することは，その文脈から明白であり，リカードが『利潤にかんするエッセイ』の中で「土地の上で作られる全生産物」(the whole produce raised on its land)[8] と書いているのを指摘するまでもないであろう。ついでに，いま少し踏み出して言うなら，生産物 (produce) という言葉を，もう一つの生産物 (products) という言葉とくらべるとき，前者には土地から生み出される農業生産物，後者には機械で作り出される工業生産物を意味するニュアンスの相違があるかのようで，その根拠として，マルサスのこのパンフレットのパラグラフ (48) の中の文章を挙げることができよう。すなわち，「……豊かなあらゆる工業国および商業国において，工業および商業生産物 (manufactured and commercial products) の価値は原材料 (the raw products) に対して非常に高い割合にのぼっている。他方，比較的貧しい国々においては，大きな国内取引および外国貿易がなく，それらの国の原生産物 (raw produce) が彼らの富のほとんど全体を構成している。」[9] しかしながら，マルサスは，たとえば，パラグラフ (22)，(23)，(24)，(29)，および (41) などで，「土地の生産物」(products of land) や，それに類する用語も多用しているので，“produce” と “products” の相違を上記のように固定的に考えるわけにはいかない。要は，それぞれの文脈に応じて注意深く読むことであろう。

ところで，マルサスが地代を定義しているパラグラフ（5）は，やがてリカードによって彼の『利潤にかんするエッセイ』の劈頭に引用されることになる。利潤の理論を展開しようとするリカードにとって，とりわけ好都合なことに，その定義の中には「利潤」という語が，「農業ストックの利潤」(the profits of agricultural stock) と「そこで雇用されている資本の利潤」(the profits of the capital employed) という二つの形で出てくるのである。資本 (capital) とは，一般に，資本家がそれを運用して利潤を得たいと望むところの購買力の総体を言うのであるが，それは運用される過程でさまざまな形態をとるであろう。その一部分が，たとえば，農業生産に適用されるとき，それは建物，灌漑設備，農道，その他の構築物のような固定資本と，そして，種子，苗，肥料，その他の備蓄物や，賃金支払いの準備金などの流動資本とから成る雑多な品目の集合体となり，この集合体が農業ストックと呼ばれるのである。そこで，さまざまな運用の機会を与えられている一般購買力としての資本について考えられる利潤と，運用の機会を農業生産に限定されている「農業ストックの利潤」との相違は，おのずと明らかであろう。そして，「そこ（農業）で雇用されている資本」というように限定された場合の資本の利潤が，「農業ストックの利潤」と同義となることもまた明白である。

さて，第Ⅱ章の最初の三つのパラグラフでマルサスはこう述べる。

「(9) この問題を非常に注意深く，かつ繰り返えし検討したうえで，私はアダム・スミスあるいは（重農主義の）エコノミストたちによ

8) *The Works and Correspondence of David Ricardo*, Vol. IV, p. 16.
9) Malthus, *op. cit.*, p. 24.

ってとられた，いずれの見解にも，そうして，より現代に近い一部の経済学者たちによってとられている見解にはいっそう，同意できないことを知った。

(10) これらの著述家たちのほとんどすべての人々が，地代を，その性質とそれを支配する法則において，独占の特性を有する価格が生産費を越える余剰と，きわめて類似したものと看做しているように，私には思われるのである。

(11) アダム・スミスは，もっとも彼の著書の第Ⅰ編第11章のいくつかの箇所で地代に対して真理の光を当てて考察し，また，他の誰よりも経済学にかんする正しい観察をその著書の各所に示してはいるけれども，原生産物の高価格の最も本質的な原因にしばしば触れているものの，それを十分に明確には説明していない。そうして，土地のきわめて顕著な特異性に注意を向けることなく，地代にも独占という用語を適用することによって，彼は読者に対して，生活必需品の高価格の原因と，独占商品の高価格のそれとの間の真の相違について確たる印象を与えない。」[10]

以上の文章によって，このパンフレットにおけるマルサスの学問的意図が，地代をはっきりと自然的現象として，あるいは，独占的ではない，すなわち，競争の作用によって消滅することのない現象として説明することにあるのは明らかであろう。続いてマルサスの議論はフランスの重農主義者や，セイとシスモンディ，そしてブキャナンたちの諸説の批判に向けられるが，われわれの目的にとっては，それらは省略して，直ちに第Ⅲ章に目を向けるのがよい。

第Ⅲ章「地代の性質と起源」は，第Ⅰ章の最後のパラグラフ（8）で示唆されている原生産物の高価格の原因の究明から始められる。マルサスはこう述べるのである。

「(18) 原生産物の高価格の諸原因は三つあると言うことができる。

(19) 第1に，そして主たるものとして，その土地の上で雇用される人員の暮らしの維持に必要とされるよりも多量の生活必需品を生み出すことを可能にするところの，大地の質。

(20) 第2に，生産される必需品の数量に比例して，それら必需品自体の需要を創り出すことのできる，あるいは，需要者の人数を増大させることのできるところの，生活必需品に特有の質。

(21) そして，第3に，きわめて肥沃な土地が比較的に稀少なること。

(22) 土壌の質と，そしてその生産物 (its products) の質は，ここでは原生産物 (raw produce) の高価格の主要な原因として注目されているが，それらは自然が人間に与えてくれるものである。それらは独占とは，まったく結びつきがないのであり，そうして，しかも，地代の存在にとっては絶対的に不可欠のものであるので，それらを欠くならば，稀少性が，あるいは独占がいかなる程度にのぼろうとも，生産費を越える原生産物の価格の余剰を地代の形で生じさせることはありえないであろう。」[11]

この最後のパラグラフ (22) において，マルサスは原生産物の高価格の原因，より正確に言えば，原生産物の価格がその生産費を越えて余剰を生み出す原因として，第1と第2のそれが不可欠の重要性を有すると述べている。第1の原因，いわゆる「大地の質」(that quality of the earth) がそうであることは，パラグラフ (19) の記述だけで十分に明らかであろう。しかし，第2の原因，彼の言う「生活必需品に特有の質」(that quality peculiar to the necessaries of life) がどうしてそうなのかは，パラグラフ (20) の記述だけでは判りにくい。そこで，マルサスは急いで，こう説明を加えるのである。

「(24) もしも生活必需品――すなわち，土地の最も重要な生産物 (the most important

10) *Ibid.*, pp. 2-3.

11) *Ibid.*, pp. 8-9.

products of land) が，その数量の増加に比例する需要の増加を創出するというこの性質を持っていないとしたならば，このような数量の増加はそれらの交換価値の低下を惹き起こすことであろう。一国の生産物 (the produce of a country) がいかに豊富であろうとも，その国の人口は停滞したままであるかもしれない。そうして，このような豊富さは，それに比例する需要を欠くならば，そして，このような事情のもとでは自然に起こるであろうところの，労働の穀物価格 (corn-price of labour)〔＝実質賃金〕の高騰を伴なうならば，原生産物の価格を工業製品の価格のように，その生産費にまで低下させるかもしれないのである。」[12]

これを裏返えして言えば，マルサスは，工業製品の場合には，競争の作用の帰結として，価格が生産費に一致するところまで低下し，余剰としての地代は発生しないと述べているのである。そうして，原生産物，すなわち農業生産物の場合には，競争の作用が行きわたった後でさえもなお，余剰としての地代が発生する特別の理由があるというわけである。換言するなら，マルサスにあっては，従前の諸説と異なり，工業製品と農業生産物との間には，自然的価格の決定に大きな相違が認められているのである。

原生産物の価格に余剰の生じる第3の原因，すなわち，「きわめて肥沃な土地が比較的に稀少なること」にかんするマルサスの所論は第Ⅲ章§4を構成する7つのパラグラフに述べられている。そうして，パットンの言う「リカードの体系の中にうまく適合し，そうして，食糧価格と利潤の関係にかんする彼の理論の証明を，より完全なものにする」新しい地代の理論の本質的部分は，主として，ここに述べられているのである。その最初のパラグラフは地代の起源に触れている。すなわち，

「(35) 初期の社会において，あるいは，より特筆さるべきは，旧い社会の知識と資本が新しい肥沃な土地の上で雇用されるときには，この神の豊かな賜物である余剰生産物 (surplus produce) は，主として，非常に高い利潤の形で現われるのであって，地代の形ではほとんど現われることがない。肥沃な土地が豊富にあり，そうして，求める者は誰でもそれを手に入れることができるとき，もちろんのことながら，地主に地代を払う者など誰もいないであろう。しかし，このような状態がいつまでも続くということは，自然の法則，そして，土地の限界とその質のありように照らしてつじつまが合わない。土壌の質と立地との多様性は，あらゆる国にかならず存在するにちがいない。すべての土地が最高に肥沃であるはずはない。すべての土地が航行可能な河川と市場に至近の位置にあるはずがない。とすれば，最高の自然的肥沃性と最高の立地的優位性を有する土地の上で資本を雇用する諸手段を越えて資本が蓄積されると，利潤は低下するにちがいない。と同時に，人口が生存資料を越えて増大する傾向は，一定の時間の後に，労働の賃金を低下させるにちがいない。

(36) 生産費はこうして減少するであろうが，しかし，生産物の価値 (the value of the produce)，すなわち，それが支配することのできる労働の量と，穀物以外の労働の生産物 (the other products of labour) の量，は減少するのではなくて，増大するであろう。生存資料を需要するとともに，有益でありうるならどのような仕方であれ役務を提供する用意のある人々の数が増大するであろう。それゆえ，食糧の交換価値は生産費を越えて上昇する。この生産費の中には，その土地の上で雇用されているストックの十分な利潤として，当期の現実の利潤率に従って見積もられたものが含まれるのである。そうして，この生産費を越える超過分が地代である。

(37) これらの地代が恒久的に，ストックの利潤の，あるいは，労働の賃金の一部分としてとどまることは不可能である。もしかりに，ス

12) *Ibid.*, pp. 9-10.

トックの利潤と，そして，その結果として，耕作経費を決定的に低下させるような蓄積が行なわれて，より劣等な土地の耕作がひき合うようになるものとしたならば，より豊かな土地の耕作者たちは，もしも彼らが地代を払わないとしたなら，たんなる農業者，あるいは，農業ストックの利潤で暮らしを立てる人ではなくなるであろう。彼らは，農業者と地主の性格を併わせ持つことになるであろうが——そのような組み合わせは，普通に見られないことではけっしてない。しかし，そのような組み合わせは，地代の性質を，あるいは，地代が利潤から本質的に分離されるという事実を，少しも変えないのである。もしもストックの一般的利潤（the general profits of stock）が20パーセントであり，そして，土地の特定の部分が，そこで雇用されている資本に対して30パーセントを生み出すものとしたならば，この30パーセントのうちの10パーセントは，それを受け取る者が誰であろうとも，明らかに，地代であることになろう。」[13]

上掲のパラグラフ（35）において，マルサスは，土地を資本と労働に対比した場合の相対的な稀少性と，地代，利潤，および賃金との関係を論じている。資本と労働に比して肥沃な土地が豊富に存在する「初期の社会」では，土地は，オーストリア学派風に言えば，いわゆる自由財に等しく，それゆえ，第1の原因によって余剰生産物が存在しても，それは相対的に稀少な資本に対する報酬としての利潤として現われるのであって，地代としては現われないことが，まず指摘されている。つぎに，資本蓄積と人口増加の進展にともなって「肥沃な土地の相対的稀少性」が生じて，肥沃な土地は，いわゆる経済財となり，その使用の価格たる地代が発生する事情が示唆されている。そうして，その事情を裏側から見れば，資本と労働の相対的稀少性がしだいに消滅するにつれて，利潤と賃金が低下することが，最後に指摘されるのである。

ここで，前稿に引用した1915年2月6日付でマルサスに宛たリカードの書簡の一節を想い出そう。

「地代の性質と増進にかんするあなたのエッセイを私はいま非常に熱中して読んでしまったところです。……こう申してもおほめしたことにはならないかと存じますが，その中の主要な原理はすべて私の心に完全にかなうものです。……しかしながら，あなたがストックの利潤と，そして労働の賃金とに対する地代の関係を分離させて考察していらっしゃらないことを残念に思わないわけにはまいりません。」[14]

リカードの言う「主要な原理」の一つが，パラグラフ（35）で述べられている《相対的稀少性の原理》であることは明白である。そうして，彼の意に満たない「ストックの利潤と……労働の賃金とに対する地代の関係を分離させて考察して」いないマルサスの所論の発端もこのパラグラフの中に見られるのである。

リカードは上掲の書簡の一節に続けてこう述べていた。

「このエッセイには，私の同意できない部分が他にもあります。それらの一つは，農業上の慣行か，あるいは，農耕具かの改良が地代に及ぼす効果です。それらは直接的な効果において農業家にだけ利益となり，地主には利益にならないように私には思われます。そうして得られる増大した生産物のすべて，あるいは，同じ量の生産物を得るに当たって生じる節約分はその全部が農業家の利益になり，その結果，それは蓄積と，そして，より劣等な土地の耕作とを促進することもありうるので，地主はそれから間接的に利益を受けるにすぎないと，私は考えるのです。」[15]

上掲のパラグラフ（36）において，マルサス

13) *Ibid.* pp. 17-18.

14) Ricardo, *Works*, Vol. VI, p. 172. 訳文は本誌前号 p. 162 より引用。

15) *Ibid.*, p. 17. 訳文は本誌前号 p. 162 より引用。

は，生産費の低下から生じる余剰の増大がそのまま地代の上昇につながると述べているのであるが，それに対してリカードは，この書簡の一節で，そのような余剰の増大は，直接的には，利潤の上昇となって農業家に帰着するという考えを明らかにしたのである。リカードは，その後，『利潤にかんするエッセイ』の脚注の一つにこう付記している。すなわち，

「賃金の低下か，あるいは，農業の改良かの結果として得られる生産物の余剰は，地代を上昇させる原因の一つであるとマルサス氏は考えている。それは，私には，利潤を増大させるだけであるように思われる。」[16]

この文章に続けて，リカードはマルサスのパラグラフ（36）の最初の文章を引用するのである。しかし，マルサスは先のリカードの書簡に対する2月12日付の返書の中で，こう応酬していたのであった。

「利潤の問題につきましては，私たちは考えを異にしておりますので，それは確かに別途に討論するに値する問題であろうと思います。農業上の慣行と農耕具との改良が地代に影響するとはお考えになっていらっしゃらないことに私はかなりの驚きを感じております。これらの改良は，少数の農業家に，そして，それらの人々の現行の借地期間中に限定されるので，それらの改良の優位性は，もちろん，それらの農業家に帰着するにちがいありません。しかし，その後では，それらはほとんど全面的に地代に影響するように私には思われるのです。このことはスコットランドでは顕著な事実でありました。」[17]

マルサスの見解が，より直接的に経験的事実に基礎を置くものであることは，この引用の最後の文章にもあらわれているが，彼の『地代の研究』の第Ⅲ章§4の残りのパラグラフ（39）および（40）の内容を見るならば，いっそう明らかになるであろう。マルサスの接近法のこのような特徴がきわめて早い時期に，たとえば，1800年のパンフレット『食糧の高価格』の中に，すでにあらわれていることは，前稿で触れたように，ケインズが多大の共感をもって指摘したところである。すなわち，「マルサスの良き常識に基づく考え方」に対して，「リカードはそれよりもはるかに厳密な接近法を好んだ」のであり，「マルサスの方法をきわめて皮相なものと見たのである。しかし，リカードは彼の高度に抽象的な議論の数多くある一連の段階を単純化する過程で，必然的に，そして，彼自身が意識した以上に，現実の事実から遊離することになった。他方，マルサスはその議論を結論にはるかに近いところから始めることによって，実際の世界で起こると予想されるところのものを，より的確に捉えたのである。」[18] ケインズのこの所感は《有効需要》をめぐる議論にかんして述べられたものであるが，《地代の理論》についての両者の議論の性格にもよく当てはまるものと考えられる。こうして，この点にかかわるマルサスとリカードの見解の相違は，純粋論理の見地から決着をつけられるべきものではなく，両者の意識下の世界が微妙につながる事実認識の相違として捉えられなければならないであろう。

パラグラフ（37）におけるマルサスの所論は，リカードの見解との相違点を微妙に反映しているように思われる。資本蓄積と人口増加の結果として，利潤と賃金が低下すると，生産費が減少（マルサスの理論では，パラグラフ（5）の定義によって，利潤は生産費に含められているので）して，すでに耕作されている肥沃な土地の余剰生産物は増大する。それを処分する当事者は地主ではなくて，農業家，あるいは，このパラグラフの言葉では「耕作者」である。それゆえ，「もしも彼らが地代を払わないとした

16) Ricardo, *Works*, Vol. IV, p. 11n.
17) Ricardo, *Works*, Vol. VI, p. 174. 訳文は本誌前号 p. 163 より引用。
18) J. M. Keynes, *Essays in Biography*, the new edition (London: Rupert Hart-Davis, 1951), p. 103. 訳文は本誌前号 p. 168 から引用。

なら,」肥沃な土地を耕作している農業家は増大した余剰をすべて手に入れることになる。こうして農業家の手に入る余剰を，マルサスは「利潤」と呼ばず，あえて「地代」と呼ぶのである。なぜなら，彼は「農業ストックの通常利潤率」(パラグラフ（5）の用語)，あるいは，「ストックの一般的利潤」[19] (パラグラフ (37) の用語) によって見積もられる利潤を，この農業家の生産費の中に含めており，彼の定義によると，それ以外には利潤を考えることができないからである。パラグラフ (37) の数値例にならうと，そうして見積もられる利潤は，この農業者が肥沃な土地の上で雇用している資本の20パーセントに当たり，彼の手元に残る余剰は10パーセントに当たるとされている。こうして，「土地の特定の部分が，そこで雇用されている資本に対して30パーセントを生み出す」とき，そのうちの20パーセントが利潤であって，残りの10パーセントは,「それを受け取る者が誰であろうとも,」彼の定義によれば，地代と呼ぶほかないのである。そうして，それは農業家の，あるいは資本の，競争を通じて，やがては地主に支払われることになるという見方に照らして，マルサスのこの用語法は，窮極において，正当化されるとも考えられるであろう。

マルサスは，この余剰の起源に着目して，それを地代と呼んでいるようである。その意味において，彼は機能的分配の観点に立っているということができるかもしれない。現代の典型的な機能的分配理論である限界生産力の原理になぞらえて言えば，上記の10パーセントの余剰が土地の限界生産力に見合うものであるとすれば，それを実際に受け取る者が企業者であっても，それを地代と呼ぶことには何がしかの意味が認められようと言うものである。もっとも，マルサスは《土地の限界生産力》にではなく，《土地の相対的稀少性》に依って立つのではあるけれども。

これに対してリカードは，農業家が受け取るものは何であれ「農業ストックの利潤」と呼ぶのであろうか。彼の場合に，余剰が利潤であるのか，あるいは地代であるのかを決めるものは，その余剰の起源によるのではなく，それを受け取る者が農業家であるか，あるいは，地主であるかによるかのようである。この意味で，リカードは個人的分配の観点に立つと言うことができるであろうか。いずれにせよ，われわれはリカードの『利潤にかんするエッセイ』の内容をつぶさに見るまでは，このような断定を下すわけにはいかないのである。

マルサスの『地代の研究』の第Ⅲ章を構成する上掲の諸パラグラフからだけでも彼の地代の理論の概略を察知することができるかもしれないが，最後に第Ⅳ章§1を構成する次のパラグラフを掲げないならば，画龍点晴を欠くことになろう。

「(43) 資本が蓄積されてきて，国中で最も耕作に適した土地に労働が適用されてしまうと，肥沃度か，あるいは立地かにかんしてもっと不利な条件のもとにある他の土地が有利に使用できるようになるかもしれない。利潤を含めた耕作の費用が低下してきているので，より劣等な土地か，あるいは，市場からより遠隔な土地は，当初は地代を生み出さないけれども，これらの費用をちょうどまかなって，耕作者の意に十分に応えるものになるかもしれない。そうして，再度，ストックの利潤か，あるいは労働の賃金かが，あるいはまた，その両方がなおいっそう低下すると，もっと劣等な，あるいは，もっと立地の不利な土地が耕作されるようになるかもしれない。そして，このような段階が進

19) パラグラフ (37) における「ストックの一般的利潤」は，特定区画の土地の上で雇用されているストックに対して，農業ストック一般の利潤の意味であることが，その文脈から明白であるから，それはパラグラフ（5）の（農業ストックの通常利潤」と同義とすることができる。リカードの利潤の理論においては，農業利潤に加えて工業および商業利潤が考慮されることになり，これらすべてを視野に置いた資本一般の利潤率を意味する「一般利潤率」という概念が現われるが，それはマルサスがここで言う「ストックの一般的利潤」とは別の概念である。

むごとに，もしも生産物の価格が低下しないとするならば，地代が上昇するであろうことは明白である。そうして，その土地に雇用されていない人々の資本によって援助されて，労働者階級の勤勉さと賢明さが，耕作者と地主に対して交換に与えるものを何か見出すことができるかぎりにおいて，生産物の価格は低下することがないであろう。そして，その何かが耕作者と地主たちに刺戟を与えて，農業に向けられる彼らの努力を低下しないように持続させ，彼らの生産物の余剰を増加させ続けるのである。」[20]

こうして，われわれはマルサスの『地代の研究』の中に，いわゆる差額地代の理論が十全な形で述べられていると言うことができる。このマルサスの地代の理論を，リカードがどのようなやり方で，彼の利潤の理論の中に取り入れたかを見ることが次の課題である。

III

リカードは『利潤にかんするエッセイ』の序文でこう述べている。

「資本の利潤（the profits of capital）という主題を論じるにあたって，地代の騰落を規制する原理を考察することが必要とされる。なぜなら，以下に見るように，地代と利潤は相互にきわめて密接な関係を有するからである。地代を規制する原理は以下で簡潔に述べられる。そうして，それはマルサス氏のすぐれた近著の中で十全に，かつ，みごとに展開されている原理とごくわずかながら異なってはいるが，私が同氏に負うところはきわめて大きい。ストックの利潤（the profit of stock）を規制する原理と併わせて，この原理を考察することによって，私は穀物の輸入を法律で制限しない政策に確信を抱くようになった。マルサス氏のあらゆる著作物の中で述べられている一般的原理からすると，利潤と富がこの問題にかかわるかぎりにおいて，同氏は私と同じ意見を保持されるものと私は了解するのである。――しかし，氏は，じっさいには，わが国の食糧の大部分を外国の供給に依存させることの危険を重大であると見るので，全体として輸入を制限することが賢明であると考えておられる。私は，このような怖れを氏と共には抱かず，そうして，おそらくは，穀物の低価格の有利さをより大きく見積もっているので，異なる結論に達したのである。氏の近著――『意見の根拠』の中で主張されている反対論のいくつかに，私は応答しようと努力してみた。それらの反対論は氏が怖れておられる政治上の危険とは無関係であるように，私には思われるとともに，氏自らその諸著作によってみごとな貢献をしてこられた自由貿易の有利性にかんする一般学説とも，それらは首尾一貫しないように思われるのである。」[21]

この序文に続く本論は95個のパラグラフから成るが，そこには章あるいは節などの小区分が示されていないので，われわれは，例によって，すべてのパラグラフに（1）から（95）までの通し番号を付して参照の便利をはかるとともに，章・節の目次を作成してリカードの議論の構造を概観することにしよう。まず，本論におけるリカードの議論の性質に着目して，パラグラフ（1）から（52）までを前編，残りのパラグラフ（53）から（95）までを後編と区分したい。前編は理論編で「利潤の理論」，そして，後編は政策編で「穀物法問題への応用」と題することができよう。われわれの当面の関心はリカードの理論体系を見ることにあるから，以下には，その前編に限って内容目次を示すことにする。

リカード『利潤にかんするエッセイ』
前編「利潤の理論」内容目次

I．農業ストックの利潤率をめぐる考察。パラグラフ（1）から（31）まで。pp. 10-19.

20) Malthus, *op. cit.*, pp. 21-22.

21) Ricardo, *Works*, Vol. IV, p. 9.

§ 1．余剰としての利潤と地代の基本的関係について。パラグラフ（1）から（10）まで。pp. 10-11.

§ 2．資本と人口が比例的に増大する過程において，一方で利潤率が低下し，他方で地代が形成される機構の最も単純な事例を説明すること。パラグラフ（11）から（23）まで。pp. 12-15.

（i）単純化のための諸仮定。パラグラフ（11）。

（ii）耕作の第1段階。パラグラフ（12）と（13）。

（iii）耕作の第2段階。パラグラフ（14）と（16）。

（iv）耕作の第3段階。パラグラフ（17）から（19）まで。

（v）集約的な耕作の場合について。パラグラフ（20）と（21）。

（vi）耕作の費用の上昇の効果。パラグラフ（22）。

（vii）人口増加の自然的限界の影響。パラグラフ（23）。

§ 3．耕作の諸段階の数値例を二つの表として提示すること（第8段階までの数値が示される）。表およびパラグラフ（24）と（25）。pp. 15-17.

§ 4．以上の分析から得られる結論。パラグラフ（26）から（31）まで。pp. 16-19.

（i）地代は絶対量でのみならず，資本に対する比率においても増大し，そのことは，地代がそれ以前の段階で得られていた利潤部分からの移転であることを意味すること。パラグラフ（26）と（27）。

（ii）利潤はもっぱら減少するが，その理由は食糧生産に適した土地が相対的に稀少になることにあること。パラグラフ（28）と（29）。

（iii）この傾向は発展の過程で生じる賃金の上昇によって増幅されること。パラグラフ（30）と（31）。

Ⅱ．資本の一般利潤率をめぐる考察。パラグラフ（32）から（52）まで。pp. 19-25.

§ 1．あらゆる産業における改良から独立に，富の進歩が独自に生み出す効果は，まず，原生産物と労働の価格を上昇させ，そうして，賃金を全般的に上昇させる結果として，一般利潤（general profits）を低下させるという命題をめぐる考察。とりわけ，この過程において，高地代と低利潤という形で現われる地主と農業家との間の利害対立が自然的性格のものであることが示される。パラグラフ（32）から（37）まで。pp. 19-22.

§ 2．富と人口が増大しつつある社会では，賃金の高低の効果とは独立に，農業の改良か，あるいは，安い穀物の輸入が行なわれないかぎり，一般利潤は低下するにちがいないという命題をめぐる考察。パラグラフ（38）から（44）まで。pp. 22-23.

（i）資本の一般利潤（general profits on capital）は食糧の交換価値の低下によって，はじめて上昇する。食糧の交換価値を低下させる三つの原因。パラグラフ（38）と（39）。

（ii）その第1の原因，すなわち，実質賃金の低下，にかんして，賃金の動向をめぐる考察。パラグラフ（40）から（42）まで。とりわけ，（41）には賃金基金説命題が提示されている。

（iii）§ 2の主命題の提示と，それが地代理論の必然的帰結であることの指摘。パラグラフ（43）と（44）。

§ 3　異例の利潤（unusual profits）をめぐる考察。パラグラフ（45）から（49）まで。pp. 34-25.

（i）商業利潤をめぐる考察。商業利潤が農業利潤を規制する場合のほうが多いという（マルサスの）見解に対する批判。新市場の発見者が，競争の作用がはたらかないうちに，得るものは異例の利潤であって，リ

カードがここで論じている一般利潤ではないこと。パラグラフ (45) と (46)。

(ii) 工業利潤をめぐる考察。機械の改良にともなう異例の利潤の発生と資本の移動について。パラグラフ (47) から (49) まで。

§ 4. 食糧の輸入と一般利潤率 (the general rate of profits) の関係について。パラグラフ (50) から (52) まで。pp. 25-26.

この目次の第Ⅱ章§4とされている部分は，後編「穀物法問題への応用」とのつなぎの役割を演じていて，リカードの議論はこのあたりから，きわめて自然に，穀物の輸入制限のための立法の効果をめぐるマルサスの立論の検討へと進むのである。議論の推移は非常に自然になされるので，二つの編をパラグラフ (52) と (53) との間で切断することには多少の不自然さが伴なわざるをえない。この意味において，われわれの編立てはリカードの全体的な議論の後半部分を端折るための便宜的手段たらざるをえないのである。

そのことを認めて前編だけを取り出すならば，リカードの「利潤の理論」が，第Ⅰ章「農業ストックの利潤率をめぐる考察」と，そして，第Ⅱ章「資本の一般利潤率をめぐる考察」の二つの部分から成っていることが注目されなければならない。そうして，前者の考察は，余剰としての利潤と地代の基本的関係の確認から始められるのである。

「(1) マルサス氏は非常に正確にこう定義している。すなわち，《地代とは，全生産物の価値のうち，いかなる種類のものであれ，土地の耕作に関係するあらゆる支出が支払われてしまった後で，その土地の所有者に残される部分である……が，それらの支出の中には，当該期間における農業ストックの通常利潤率で見積もられるところの，そこで雇用されている資本の利潤が含められる》と。

(2) そこで，農業ストックの通常利潤率と，そして，土地の耕作に帰せられるあらゆる支出とを合わせたものが，全生産物の価値に等しくなるときにはつねに，地代は存在しえないのである。

(3) そうして，全生産物がその価値において，耕作に必要とされる支出と同じにしかならないときには，地代も存在しなければ，また，利潤も存在しえないのである。

(4) 肥沃な土地が豊富にある国の植民の最初の時期においては，誰でも好むように土地を取得することができるであろうが，その場合，全生産物は，耕作にかかわる諸支出を控除した後では，資本の利潤 (the profits of capital) であり，そうして，それは地代として何も控除されることなしに，このような資本の所有者に帰属するであろう。

(5) こうして，もしもこのような土地の上で，ある個人によって雇用される資本が200クォーターの小麦の価値を有しており，その資本の半分は，建物，設備器具，等のような固定資本，また残りの半分は流動資本から成っているとするなら，——そうして，もしもこの固定資本と流動資本の置き換えをした後に残る生産物の価値が100クォーターの小麦であるか，あるいは，100クォーターの小麦に等しい価値を有するとするならば，この資本の所有者にとって純利潤 (the neat profit) は50パーセント，あるいは，200の資本に対する100の利潤ということになるであろう。

(6) ある長さの期間にわたって，農業ストックの利潤はそれと同じ率で続くことがあるかもしれない。なぜなら，同じように肥沃で，かつ同じように良い立地にある土地が豊富に存在するということがあるかもしれず，また，それゆえに，それらの土地は最初の植民者と，そして，それ以後に来た植民者の資本が増大するにつれても，当初と同じ有利な条件のもとで耕作されるということがあるかもしれないからである。

(7) 利潤が増大することさえあるかもしれない。なぜなら，人口が資本よりも急速な率で

増大して，賃金が低下することがあるかもしれないからである。そして，また，流動資本として100クォーターの小麦の価値に相当するものが必要であったのに対して，わずか90クォーター相当が必要とされるようになるということがあるかもしれないからである。その場合には，ストックの利潤は50パーセントから，57パーセントに上昇するであろう。

（8）利潤は，また，次の理由で増大することがあるかもしれない。すなわち，農業において，あるいは，耕作用器具に，同じ生産費で生産物を増大させるような改良が行なわれることがあるかもしれないからである。

（9）もしも賃金が上昇するか，あるいは，農業方式が劣悪化するとしたならば，利潤はふたたび低下することであろう。

(10) 以上に述べた諸事情は，多かれ少なかれ，つねに作用しているものである――それらは，利潤を上昇，あるいは，低下させることによって，富の進歩の自然的効果の進行を遅れさせるか，あるいは，加速させるかもしれない――が，それらは，その土地の上で同じ資本を雇用しながら，食糧の供給を増大させ，あるいは，減少させることによって，作用するのである。」[22]

リカードは議論の出発点をマルサスの地代の定義にとっているけれども，すぐに，それを彼自身の利潤の理論に適合するように，修正している。マルサスの場合には，その土地の上で雇用される資本の利潤は農業ストックの通常利潤によって見積もられて，《耕作に必要とされる諸支出》の中に含められていたのであるが，リカードが上掲パラグラフ（2）および（3）で用いている《耕作に帰せられる（あるいは，必要とされる）諸支出》の中には，利潤の範疇に属するものは何も含められていないのである。その結果として，マルサスの場合には，《耕作に必要とされる諸支出》を超過する生産物の価値の余剰はすべて地代の範疇に入れられるのに対して，リカードの場合には，その余剰はまず利潤となり，やがて，後に示される機構によって，その利潤から地代が分離，派生することになるのである。リカードは，このように地代の定義を修正したうえで，マルサスが『地代の研究』の第Ⅲ章§4の，とりわけパラグラフ(35)で述べた《土地の相対的稀少性の原理》を援用する。すなわち，リカードは上掲パラグラフ（4）において，いわば土地がまったく稀少性を欠くために，土地の用役が《自由財》となって，地代が発生しない状況を想定するのである。ここで，土地からの生産物の余剰が発生している状況について，マルサスが地代の定義を与えたときに考えていたものと，リカードが彼の議論の最初の段階で考えているものとの間には微妙なくいちがいがあることに注意しよう。

マルサスが地代を定義するにあたって想定していた状況のもとでは，その土地の周囲で土地の使用をめぐる諸資本の競争が十分に行なわれていて，その土地の上で資本を雇用しようとする農業家が自己の利潤を見積もるためのデータとしての《農業ストックの通常利潤率》なる概念が存在している。それに対して，リカードがパラグラフ（4）で想定している状況のもとで生じる余剰はすべて「資本の利潤」になるとされているのであるが，その利潤が，諸資本の競争の結果として成立する通常利潤率に対して，どのような関係にあるのかは，彼の議論のこの段階において，かならずしも明らかではない。しかしながら，おそらくは，そこでは土地がまだ稀少性をまったく有していないのであるから，土地の使用をめぐる諸資本の競争は起こっておらず，それゆえ，《農業ストックの通常利潤率》の観念はまだ形成されていないと考えることができるであろう。こうして，その土地から生み出される余剰は，もしもそれが誰かによって取得されるべきであるとするなら，誰よりも先に農業家によって取得されるであろうという意味において，「利潤」と呼ぶことができる

22) *Ibid.*, pp. 10–11.

かもしれないけれども，その余剰と《農業ストックの通常利潤率》との関係は，彼の議論のこの段階においては，まだ決定されないままになっていると考えられるのである。

われわれの結論を先取りして言えば，マルサスの地代の定義の中に現われる利潤の概念と，その定義を出発点としながらも，重大な修正を加えて定義されるリカードの利潤の概念との間の相違は，穀物法問題を「地代の理論」によって考察しようとするマルサスと，「利潤の理論」によって考察しようとするリカードの基本的態度の相違に由来するのである。資本の競争の結果として成立する《農業ストックの通常利潤率》は，マルサスの「地代の理論」にとっては，その枠の外から与えられるデータである。そして，資本蓄積と人口増加の過程で生み出される余剰は，その当初は農業家が取得することがあるとしても，競争が十分に行なわれたあかつきには，地主が受け取ることになるものである。農業家が窮極的に受け取ることになるものは，マルサスが初めから《耕作に必要とされる諸支出》の中に含めて余剰から控除しておいた《農業ストックの通常利潤率》によって見積もられる部分であって，それを超過する農業家の取得分は，いわば《異例の利潤》にほかならず，資本の競争の帰結として消滅すべきものだからである。他方，リカードの「利潤の理論」にとって，《農業ストックの通常利潤率》はその理論の枠の外から与えられるものではなく，まさにその理論によって決定されなければならないものなのである。それは，やがて見るように，彼の「余剰」，すなわち「利潤」の中から地代を分離・派生させていく過程の帰結として決定されるであろう。この地代の形成過程が解明されるまでは《農業ストックの通常利潤率》の値を定めることはできないのである。もちろん，そうして決定される《農業ストックの通常利潤率》の値は，マルサスの「地代の理論」において与件とされるものと同一の値をとるのでなければならず，また，リカードの「利潤」から分離・派生する地代の段階的構造は，マルサスの定義する地代のそれと同一のものでなければならない。

「利潤」の概念をめぐるリカードとマルサスとの相違点は，いまや明白である。リカードは彼のいう《耕作に必要とされる諸支出》を上回るところの生産物の価値の余剰を「利潤」と呼んでいる。マルサスは《農業ストックの通常利潤率》によって見積もられるものを利潤とするのである。リカードの「利潤」がマルサスのそれを超過するとき，その超過分を取得する者が現実に農業家であっても，マルサスはそれを地代と呼ぶ。なぜなら，それは，土地の使用をめぐる諸資本の競争が十分に行なわれたあかつきには，地主に帰着するはずのものだからである。上掲のパラグラフ（6），（7），（8），（9），および（10）において，リカードは彼の「利潤」が，資本蓄積，人口増加，農業上の改良，賃金の変動などと，どのような基本的関係を有するかを例示している。われわれが前節において，マルサスの『地代の研究』のパラグラフ（36）にかんする注釈のために引用したリカードの脚注は，上のパラグラフ（10）の末尾に付けられたものである。前節のその箇所で触れたリカードとマルサスの意見の相違，すなわち，農業上の改良が地代あるいは利潤に及ぼす効果についての両者の意見の相違の直接的原因は，利潤の概念における両者の相違に求めることができる。

IV

リカードの「利潤」から地代が分離・派生して《農業ストックの利潤率》が決定される機構は，前編第Ⅰ章§2において述べられる。彼はその機構の基本的な在りようを明確に示すために，事態を単純化するための諸仮定を置く。

「(11) しかしながら，われわれはこう想定するであろう。すなわち，農業ではいかなる改良も起こらず，そうして，資本と人口はその本

来の釣り合いを保って増大するので，その結果，労働の実質賃金は一様に同じままであり続けると。――その結果として，われわれは資本の成長，人口の増加，および，より遠隔にあり，より肥沃度の劣る土地に向かう耕作の拡張に対して，それらの固有の効果をどのように割り当てるかを知ることができるであろう。」[23]

そのうえで，耕作の第1の段階はこう説明される。

「(12) 社会のこのような状態において，農業ストックの利潤 (the profits on agricultural stock) が仮定によって50パーセントとされるとき，社会のこのような段階に普通とされる未発達な製造工業か，あるいは，原生産物と引き換えに，需要される見込みのある商品を調達する手段としての対外商業で雇用されるその他のすべての資本の利潤もまた50パーセントとなるであろう。*

*厳密に言って，農業と製造工業の利潤率 (the rate of profits on agriculture and manufactures) が同じになるであろうことを意味するのではなくて，それらが相互に何らかの釣り合いを保つであろうということである。アダム・スミスは，資本の一部の雇用では，その他の雇用でよりも利潤がいくぶん少なくなる理由を，それらの雇用の安全性，清潔度，および社会的に尊敬される程度，等によって説明している。

その釣り合いがどのようになるかは，私の議論にとって重要なことではない。なぜなら私は次のことを論証したいと望むだけだからである。すなわち，農業資本の利潤 (the profits on agricultural capital) は，製造工業と商業で雇用される資本の利潤に，類似の変動を惹き起こさずには，実質的に変動するはずがないということがそれである。

(13) もしも貿易で雇用されている資本の利潤 (the profits on capital employed in trade) が50パーセントよりも高いとしたならば，資本はその土地から引き揚げられて，貿易で雇用されることであろう。もしもその利潤が低いとしたならば，資本は貿易から引き揚げられて，農業に向けられることであろう。」[24]

一見したところ，パラグラフ (12) で想定されている状況は，前節で触れたパラグラフ (4) と，それに数値例を与えているパラグラフ (5) で想定されている状況と同じであるかのように受け取られるかもしれない。しかしながら，パラグラフ (5) までのリカードの説明では，小麦200クォーター相当の資本に対する利潤が100クォーターの小麦に相当するとしても，そのように数値を与えられた農業ストックの利潤が，マルサスの言う《農業ストックの通常利潤率》によって見積もられる利潤とどのような関係に置かれているかは，まだ説明されていないとは，すでにわれわれが指摘したところである。パラグラフ (12) の記述は，この点についてきわめて重要なデータを新たにつけ加えている。すなわち，そこでは，最も肥沃度が高く，そして最も有利な立地にある土地の諸区画は，すべて耕作されてしまっていて，それらの諸区画の使用をめぐる諸資本の競争は，製造工業と商業とに見出される機会をも考慮に入れて，すでに十分に行なわれており，その結果として，農業，製造工業，および商業でそれぞれ雇用される諸資本の利潤率は平準化していることが示されている。

こうして，リカードはこの第1段階において，すでに《農業ストックの利潤率》の決定の本質的部分を述べてしまっているのである。その最も肥沃にして，かつ最も有利な立地条件を有する土地の一区画について，マルサスの地代の定義を適用してみると，《農業ストックの通常利潤率》50パーセントによって見積もられる利潤部分を含めた《耕作に必要とされる諸支出》がその区画の生産物の価値とちょうど等し

23) *Ibid.*, p. 12.

24) *Ibid.*, p. 12.

くなっているので，その生産物の余剰，すなわち，マルサスの「地代」はゼロである。リカードは，この場合，彼自身の「利潤」の概念に立って，地代がゼロとなる状況を設定しているのであるから，このような状況にかんするかぎりにおいて，両者の議論に相違は生じないのである。

ところで，リカードがすでに《農業ストックの利潤率》の決定にかかわる本質的部分を述べてしまっていると言ったところで，彼の「利潤の理論」がここで終わっていいことにはならない。なぜなら，まだ地代の形成される過程と利潤率の低下傾向を生み出す機構が述べられていないからである。そこで，耕作の拡張の第2段階の説明を見ることにしよう。

「(14) 最初の植民者たちのすぐ近くの地域における肥沃な土地のすべてが耕作されたのちに，もしも資本と人口が増加するとしたならば，より多くの食糧が必要とされることであろうが，その食糧はそれほど有利な立地条件を持たない土地から調達されるほかないであろう。そうして，その土地は同程度に肥沃であるものと，また，作られる場所から消費される場所まで生産物を輸送するために，より多くの労働者や馬匹等を雇用することが必要とされるものと想定するならば，たとえ労働の賃金に何の変化も起こらないとしても，同じ生産物を得るのに，より多くの資本が恒久的に雇用されなければならないことが必要とされるであろう。この付加分が小麦10クォーターの価値を有するものと想定すれば，この新しい土地の上で雇用される全資本は，古い土地で得られるのと同じ収穫をあげるには，210となるであろう。そうして，その結果，ストックの利潤は50パーセントから43パーセントに，あるいは，210の資本に対して90にまで低下するであろう。*

＊ストックの利潤が低下するのは，同じく肥沃な土地が得られないからである。そして，社会の進歩の全過程を通じて，利潤は食糧調達の難易度によって規制されるからである。このことは，非常に重要な原理であるが，イギリスの経済学者たちの著述のなかではほとんど看過されてきた。彼らはストックの利潤が食糧の供給とは無関係に，商業的原因によって増大させられると考えているようである。

(15) 最初に耕作された土地では，収益は以前と同じく，50パーセント，あるいは，小麦100クォーターであるであろう。しかし，ストックの一般的利潤 (the general profits of stock) は農業における資本の最も利益の小さい雇用から得られる利潤によって規制されるので，その100クォーターの分裂が起こって，そのうち43パーセント，あるいは86クォーターがストックの利潤を構成し，そして，7パーセント，あるいは14クォーターが地代を構成することになるであろう。そうして，小麦210クォーター相当の価値を有する資本の所有者は，遠隔の土地を耕作するにせよ，あるいは，最初の植民者に14クォーターの地代を払うにせよ，まったく同じ利潤を取得することになるであろうと考えてみると，このような分裂が起こるにちがいないことは明白である。

(16) この段階において，貿易で雇用されるすべての資本の利潤 (the profits on all capital employed in trade) は43パーセントまで低下するであろう。」[25]

土地の使用をめぐる諸資本の競争の結果として，第1の段階で達成された土地と，そして，資本と人口の対との間の釣り合いは，50パーセントという《農業ストックの利潤率》とゼロ地代とによって象徴されていたのであるが，第2段階の最初に与えられる資本と人口の，相互に本来的な釣り合いを保った増大によって，これまでの土地と資本・人口との釣り合いは破られることになる。そこで新しい釣り合いを求めて行なわれる調整の過程が第2段階の内容を構成するのである。

25) *Ibid.*, pp. 13-14.

資本と人口の新規に増加した部分は，どこかに雇用の機会を見つけ出さなければならない。なるほど，人口の増加によって，リカードの言うように，「より多くの食糧が必要とされる」であろうが，そのことはかならずしも，これらの資本と人口が国内の農業で雇用されなければならないということを意味するものではない。製造工業と，そして海外の植民地にもさまざまな雇用機会は見出されうるのであり，とりわけ，18－19世紀のイギリスではそうであったわけで，このことがマルサスをして，農業の利潤が商業の利潤を規制するいわれはないと言わしめた現実的背景をなすものと考えられる。[26] しかしながら，リカードはもっぱら，国内農業における雇用機会に彼の注意を集中し，農業ストックの利潤率を決定する理論を構築したのである。

リカードは議論をさらに単純化するために，パラグラフ (14) で，新規に食糧の生産を行なう土地は，「同程度に肥沃で」あり，立地条件だけが不利になると想定する。そうすれば，古い土地と同じ生産物を消費者に供給するためには，生産物の輸送にともなってより多くの資本が恒久的に雇用されなければならないと述べられるのである。われわれは前々稿で，[27] リカードの「利潤の理論」における《収益逓減法則》の在りようを問題にしたのであるが，それを考えるための新しい材料がここに見出されることを指摘しておこう。

次に，パラグラフ (15) の中の「ストックの一般的利潤」(the general profits of stock) が，文脈から明らかなように，農業ストックの一般的利潤であり，やがて，リカードのパンフレットの前編第Ⅱ章で論じられることになる「資本の一般利潤」(general profits on capital) とは異なることを指摘しておきたい。後者は，農業に限らず，製造工業および商業等のあらゆる産業を視野に入れて資本を運用する立場で考えられる利潤率である。個々の言葉の意味は，その言葉が置かれてある文脈に則していちいち秤量されるべきものではあるが，語形から判別できる一般的な特徴として，特定の産業の中で考えられる一般的利潤の場合には定冠詞 "the" を付けて "the general profits of stock" 〔パラグラフ (15) と (37)〕というように表わすのに対して，全産業を視野に置いた一般利潤には，冠詞のない "general profits on capital" 〔パラグラフ (39)〕や，あるいは "the level of general profits" 〔パラグラフ (46)〕の形を取ることが指摘できる。

さて，農業ストックの一般的利潤が「農業における資本の最も利益の小さい雇用から得られる利潤（すなわち，《限界的な農地》で雇用される資本の利潤）によって規制される」のは，農地の使用をめぐる諸資本の競争の結果としてである。競争の効果がまだ十分に現われない当初において，最初に耕作されていた土地の小麦100クォーター相当の余剰の分裂は十分に行なわれず，やがて地代となるべき14クォーター相当の部分のかなりの部分がリカードの言う「利潤」として農業家の取得するところとなるのである。このとき，マルサスは，農業家が「地代」を受け取っていると言うのである。なぜなら，マルサスにとって，この土地の使用から生じる利潤とは，《農業ストックの通常利潤率》によって見積もられる余剰部分を意味するのであって，それ以外の余剰部分は誰が受け取ろうとも利潤ではありえないからである。そうして，《農業ストックの通常利潤率》によって見積もられるものが，この段階で農地をめぐる諸資本の競争の所産として成立する《農業ストックの一般的利潤》と一致するときには，リカードのパラグラフ (15) の議論と，マルサスの議論，とりわけ，彼の『地代の研究』のパラグラフ (37) の議論とは，完全に整合するものとなるであろう。

26) リカード『利潤にかんするエッセイ』のパラグラフ (45), *ibid.*, p. 23 を参照せよ。
27) 拙稿「賃金基金説の系譜について(3)」第Ⅵ節の後半を参照。本誌，第34巻，第3号，pp. 451-452.

耕作の拡張の第2段階において，農地の使用をめぐる諸資本の競争の効果が出つくすと，農業ストックの一般利潤率は，50パーセントの余剰のうちの43パーセントに落ち着き，残りの7パーセントは最初に耕作された土地の地代として，その地主が取得することになる。そうして，諸資本の競争の範囲を商業の分野にも拡張するならば，パラグラフ（16）に述べられているように，商業資本の利潤率も43パーセントの水準にまで低下するであろうと，リカードは主張するのである。

V

リカードは，第Ⅱ章§2において，耕作の拡張の第3段階までを説明しているが，各段階で行なわれる議論の要領を知るためには，第2段階までの説明で十分であろう。彼は，それに続く§3において，第8段階までの数値例を要領よく二つの表にまとめている。この数値例を作成する要点を以下で検討することにしよう。

まず，第1段階で耕作されるところの，最も肥沃度が高く，かつ最も立地の有利な土地の全体を第1区画と呼び，第2段階で新規に耕作される次善の土地を第2区画，そうして，以下，順次に，第i段階で新規に耕作される土地を第i区画と呼ぶことにする。リカードにならって，われわれも粗放的耕作の場合だけを考えることにしよう。すなわち，既耕作区画に対して新規に資本と労働が追加投入されることはないものとする。その結果，各区画から生み出される余剰も一定であると考えてよい。記号を次のように定めよう。

L_i：第i区画の土地

C_i：第i区画で雇用される資本

S_i：第i区画で生み出される余剰

もちろん，この余剰は生産物の価値から，利潤部分をまったく含まない，リカードの意味での《耕作に必要とされる諸支出》を控除した残余部分である。

まず，耕作の第1段階の議論を記号を用いて表わしてみよう。第1区画の土地 L_1 に，資本 C_1 と，その資本と本来的な釣り合いを保っている労働が雇用されて，余剰 S_1 が生み出されるわけであるが，労働は終始一貫して資本と一定の釣り合いを保つものとされるから，労働投入は資本 C_1 で代表させることができて，この区画における投入・産出関係を次のように表現してよい。

$$(L_1,\ C_1) \longrightarrow S_1$$

この中に現われている三つの数値は，リカードの数値例において与件とされる。一般的に言って，余剰 S_i は利潤と地代に分裂するのであるが，第1段階においては，第1区画の土地が限界地となるので，地代は発生せず，S_1 はすべて利潤とされるのである。こうして，第1区画で雇用される資本 C_1 の利潤率は S_1/C_1 となる。

次に第2段階の議論を振り返えって見よう。それ以前に雇用されていた資本 C_1 と労働に，資本 C_2 と，それと本来的な釣り合いを保つ労働が新規に追加されたために，第1区画の土地 L_1 よりも肥沃度と立地において劣る第2区画の土地 L_2 が耕作される。それゆえ，第2段階における投入・産出関係は

$$\left\{\begin{array}{l}(L_1,\ C_1) \longrightarrow S_1\\ (L_2,\ C_2) \longrightarrow S_2\end{array}\right\}$$

と表現できる。この中の第1区画にかんする投入・産出関係が第1段階のそれと同一であるのは，主として，粗放的耕作のみを考えるという単純化の仮定による。

第2区画の土地 L_2 が肥沃度と立地において劣るということを，リカードは数値例を作成するときに，資本と余剰に次のような数値を与えることによって表現している。すなわち，

$$C_1 = 200 < 210 = C_2$$

$$S_1 = 100 > 90 = S_2$$

第2区画では，第1区画でよりも，絶対量で多くの資本を雇用しているにもかかわらず，生み出される余剰は少ないというわけである。彼の

数値例では，一般に，第n区画の資本と余剰を次のように与えている。

$$C_n=200+10(n-1)$$
$$S_n=100-10(n-1)$$

リカードの数値例が本質的な構造と傾向を端的に示してきわめて有益であることに疑いの余地はないけれども，余剰の数値の与え方は少し段階が進むと余剰の低下率を非常に大きなものにするために，全余剰に占める利潤部分を低下させる方向に作用する諸力を誇張することになりはしないかと考えられなくもない。

そこで，われわれは，リカードのパラグラフ(14)の議論と背反しない範囲で，肥沃度と立地の劣る度合を表現する別の方法を考えることにしよう。彼は，このパラグラフで，第2区画の「土地の上で雇用される全資本は，古い土地で得られるものと同じ収穫をあげるには，210になるであろう」と述べたのであった。そこで，いま第1区画と第2区画とで，土地1単位当たりの余剰を同じにしてみよう。すなわち，

$$\frac{S_1}{L_1}=\frac{S_2}{L_2}.$$

そのとき，第2区画の土地が肥沃度と立地において劣るということは，土地1単位当たりに雇用される資本の量が第1区画よりも多いということで表現できる。すなわち，

$$\frac{C_2}{L_1}<\frac{C_2}{L_2}.$$

これらの関係から，不等式

$$\frac{S_1}{C_1}>\frac{S_2}{C_2}$$

が導かれる。こうして，われわれは，資本1単位当たりの余剰が少ないということを，土地の肥沃度と立地の劣位の表現として採用することにしよう。すなわち，どの区画にかんする資本の絶対量の間にも，あるいは，余剰の絶対量の間にも，特定の大小関係を想定せず，次の大小関係だけが成り立つものと仮定する。すなわち，

$$\frac{S_i}{C_i}>\frac{S_{i+1}}{C_{i+1}},\quad i=1,2,3,\cdots.$$

さて，第2段階において，農業ストックの一般的利潤を規制するものは，この場合の限界地である第2区画の利潤である。限界地の地代はゼロであるから，第2区画の余剰S_1はすべて利潤として農業家の取得するところとなる。そうして，第2区画の資本C_2の利潤率S_2/C_2が，第2段階で農業で雇用される資本の一般利潤率とされて，第1区画の資本C_1の利潤率にもなり，その資本の利潤は$\frac{S_2}{C_2}C_1$で与えられる。そして，いまや限界内の農地となっている第1区画の土地に発生する地代は，この区画の余剰からその資本の利潤を差し引いた$S_1-\frac{S_2}{C_2}C_1$であり，それは

$$C_1\left(\frac{S_1}{C_1}-\frac{S_2}{C_2}\right)$$

と書き表わすこともできる。この最後の形式はきわめて有益である。それは，上で，われわれが第2区画の劣等度を表現した条件

$$\frac{S_1}{C_1}>\frac{S_2}{C_2}$$

が，そのまま地代を正の値とする条件であることを教えてくれる。

さて，一般に，第n段階について，農業ストックの一般利潤率を規制するものは，この場合の限界地である第n区画の利潤率である。限界地の地代はゼロであるから，第n区画の余剰S_nはすべて利潤となって，この区画で雇用される資本C_nの利潤率はS_n/C_nである。この利潤率が第n段階における農業ストックの一般利潤率とされ，その他の区画で雇用される資本C_iに適用されて，それらの資本の利潤は

$$\frac{S_n}{C_n}C_i,\quad i=1,2,\cdots,n-1.$$

となる。そして，第i区画の地代は，その区画の余剰からこの利潤を差し引いたもの，すなわち，

$$S_i-\frac{S_n}{C_n}C_i=C_i\left(\frac{S_i}{C_i}-\frac{S_n}{C_n}\right),$$
$$i=1,2,\cdots,n-1.$$

である。各区画の土地の劣等度について置いたわれわれの仮定によって，これらの地代はすべ

第1表*　　(単位：クォーター)

各区画の資本	利潤(%)	各区画の余剰	第一区の利潤	第一区の地代	第二区の利潤	第二区の地代	第三区の利潤	第三区の地代	第四区の利潤	第四区の地代	第五区の利潤	第五区の地代	第六区の利潤	第六区の地代	第七区の利潤	第七区の地代	第八区の利潤
200	50	100	100	0													
210	43	90	86	14	90	0											
220	36	80	72	28	76	14	80	0									
230	30	70	60	40	63	27	66	14	70	0							
240	25	60	50	50	52½	37½	55	25	57½	12½	60	0					
250	20	50	40	60	42	48	44	36	46	24	48	12	50	0			
260	15	40	30	70	31½	58½	33	47	34½	35½	36	24	37½	12½	40	0	
270	11	30	22	78	23	67	24	56	25.3	44.7	26.4	33.6	27½	22½	27.6	12.4	29.7

第2表*

	全資本額	全地代(クォーター)	全利潤(クォーター)	全資本にたいする利潤(%)	全資本にたいする地代の割合(%)	全余剰(クォーター)
第1期	200	0	100	50		100
第2期	410	14	176	43	3½	190
第3期	630	42	228	36	6¾	270
第4期	860	81	259	30	9½	340
第5期	1,100	125	275	25	11½	400
第6期	1,350	180	270	20	13¼	450
第7期	1,610	248½	241½	15	15½	490
第8期	1,880	314½	205½	11	16½	520

*Ricardo, *Works*, Vol. IV, p. 17. 第2表における第7期の全地代と全利潤の正しい値は，それぞれ，247½と242½である。

て正の値をとることが保証されている。

以上の要領で計算される数値例をリカードは，みごとな表にまとめている。ここに引用する第1表がそれである。この表の左の端の3つの欄には，この耕作の拡張の過程でデータとして与えられる数値が並べられている。第1欄には，耕作の各段階を始動させる資本の追加分 C_i が，初項 $C_1=200$，項差を10とする等差数列として，第8項 $C_8=270$ まで示されている。第3欄には，各区画から生み出される余剰 S_i が，これも，初項 $S_1=100$，項差を−10とする等差数列として，第8項 $C_8=30$ まで与えられている。第2欄は各段階における農業ストックの一般利潤率が並べられているが，それは結局，各段階における限界地で雇用される資本の利潤率によって規制されるから，第 i 段階については，第 i 区画の利潤率 S_i/C_i が記入されることになる。すなわち，第3欄の数字 S_i を第1欄の数字 C_i で割った値が第3欄に記入されている。リカードは，その分子になる S_i を単調減少数列，分母の C_i を単調増加数列として与えたから，利潤率は耕作の拡張につれて単調に減少する数列になっているが，われわれは条件を緩めて第2欄の数字だけが単調に減少することを要求したのであった。リカードがパラグラフ(14)の注で「ストックの利潤が低下するのは，同じく肥沃な土地が得られないから……，そして，社会の進歩の全過程を通じて，利潤は食糧調達の難易度によって規制されるからであ（り，）このことは非常に重要な原理で

ある」と述べたのは，ここのところを意味するのであり，リカードの理論にとって，この第2欄の数値が単調に減少することが本質的重要性を有するのである。

さて，耕作の拡張にともなって，限界内の土地に地代が発生すると同時に，利潤部分が減少して行く過程は，第4欄とその右側の諸欄に表示されることになる。それらの欄は，第4および第5欄が各段階における第1区画の利潤と地代を，第6および第7欄が各段階における第2区画の利潤と地代を表わすという具合に，以下順次に，各区画の利潤と地代を示す2つの欄の組から成る。耕作の各段階における利潤と地代の数値が並べられてある横列の最右端に記入されている0は，その段階の限界地の地代であり，その左隣の数値は限界地の余剰 S_i がすべて利潤になるものとして記入されている。

限界内の土地区画の資本の利潤について見るために，たとえば，第1区画の利潤が並べられている第4欄をとると，この区画が限界内地となる第2段階以降の数値は，この区画の資本 C_1 に，その段階（第 i 段階とすると）の利潤率 S_i/C_i を乗じたものになっている。したがって，この欄の数値は第2段階以下で第2欄の利潤率に比例しているわけであり，それゆえに，この区画の利潤は利潤率の低下に比例して減少する。これは，その他の区画の利潤についても言えることである。

次に限界内の土地区画の地代について見るために，第1区画の地代が示されている第5欄を例にとると，この区画が限界内地となる第2段階以降の数値は，この区画の余剰 S_1 から，その段階 i におけるこの区画の資本の利潤 $C_1\frac{S_i}{C_i}$ を差し引いた値，あるいは，それを書き換えると $C_1\left(\frac{S_1}{C_1}-\frac{S_i}{C_i}\right)$ である。第 i 段階において，S_i/C_i はその段階の限界地の肥沃度と立地を示す尺度であるから，耕作の拡張の段階 i が進むにつれて，第1区画の肥沃度と立地を示す尺度 S_1/C_1 との格差は広がり，地代が増大することになっている。

第Ⅰ章におけるリカードの考察の目的は，農業資本の蓄積過程における農業利潤の動態を明らかにすることである。したがって，ある蓄積の段階で耕作されているすべての土地区画の資本と利潤とを，それぞれ集計して見ることが必要とされる。そこで第2表を見よう。表の左端，第1欄に第1期から第8期までと記入されているのは，資本蓄積が時間の過程であることを示すこころであろう。第 n 期は第 n 区画までが耕作されるにいたっている時期を意味するから，そのとき雇用されている全資本の集計値 $\sum_{i=1}^{n}C_i$ が第2欄に示されている数字になる。

第3欄の地代総額は，第1区画が限界地となっている第1期では当然ゼロである。それ以後，第 n 期について言えば，耕作されている n 個の区画のうち第 n 区画は限界地で地代を生じないから，第1区画から第 $n-1$ 区画までの地代を集計して

$$\sum_{i=1}^{n-1}C_i\left(\frac{S_i}{C_i}-\frac{S_n}{C_n}\right)$$

の数値が計上される。こうして得られる地代総額が蓄積の進行とともに急速に増大することは，耕作の拡張とともに，限界地と限界内地との肥沃度の格差が増大することに一因があることは，その集計値の内容構造から明らかであろう。

第4欄の利潤総額は，第 n 期について言うと，その場合の限界地である第 n 区画の利潤率 $\frac{S_n}{C_n}$ を全資本 $\sum_{i=1}^{n}C_i$ に乗じたもの，すなわち，

$$\frac{S_n}{C_n}\sum_{i=1}^{n}C_i$$

である。リカードの数値例では，この値は第1期から第5期にいたるまでは増大しているが，第6期以降は減少に転じている。それは，この数値の構成要素である $\sum_{i=1}^{n}C_i$ の部分が蓄積の進行とともに増大するにもかかわらず，もう一つの構成要素である $\frac{S_n}{C_n}$ が単調に減少し，利潤総額の増減は両要素の変化率の絶対値の大小に依存するからである。そうして，先に触れたように，リカードは各区画の余剰 S_i の値を減少等

差数列で与えたために，余剰の減少率が，やがて，非常に大きな値をとるようになるという難点が彼の数値例にはあると言えるであろう。現実の諸現象について，線型近似が許容される範囲が意外に狭いことがしばしばあるのは，よく知られるところである。おそらく，リカードもそのことは十分にわかっていたのであろう。彼は本文の中で，利潤総額が増加から減少に転じる現象には一言も触れないでいる。

第5欄の全資本に対する利潤総額の割合は，第1表の第2欄の利潤の数値とまったく同じになるが，それは利潤総額の構成から見て自明のことに属する。

第6欄の全資本に対する地代総額の割合は第3欄の数字を第2欄のそれで割ったものである。第5欄の百分比と第6欄のそれとを合計したものは，第7欄の全余剰の数字を第2欄の全資本の数字で割って得られる百分比と等しくなるべきものである。前2者の合計が蓄積の進行とともに減少するのは，雇用される全資本に対する全余剰の割合が，蓄積の進行とともに低下するという《収益逓減法則》のあらわれである。

（この項続く）